

## 平成30年度 学長戦略経費（公募型プロジェクト）研究成果概要報告書

経費の種類	<input type="checkbox"/> 共同研究推進 <input type="checkbox"/> 若手教員研究支援 <input checked="" type="checkbox"/> 個人研究支援 <input type="checkbox"/> 研究推進重点設備 <input type="checkbox"/> 研究推進設備修繕
プロジェクトの名称	高い知能を有する子どもの困り感の実態把握と認知特性に応じた支援法の検討
報告者氏名・所属・職名	片桐正敏・旭川校・准教授
プロジェクト担当者氏名・所属・職名	片桐正敏・旭川校・准教授
研究内容及び成果の概要	
<p><b>【本研究プロジェクトの目的】</b></p> <p>知的能力が極めて高いが、学校適応の困難さや困り感を抱えている子どもたちが存在する。一般的な呼称として「ギフテッド」と呼ばれることがあるが、彼らは高い知的能力のほか（概ねIQ130以上）、高い学業成績、そのほかにリーダーシップや芸術的才能などを示すことで定義されている。だがこのギフテッドは、いわゆる診断カテゴリに属さず、定義の統一が図られていない。特に近年、日本でも盛んにこの呼称が用いられるようになったが、依然として本邦においても曖昧なままである。</p> <p>欧米では、ギフテッドは特別支援教育の対象とされ、専門的な支援を受けられる環境にある場合があるが、日本では特別支援教育の対象外とされ、支援はおろか、教育現場の認識は非常に低い。学校現場では、特に他害がなく、集団を乱すような行動をしなければ、問題とされることが一般的には非常に少ない。かつ、学業成績が極めて良好であれば、支援に至るケースはまずなく、学校教員の理解を得るのは難しいことは容易に窺える。しかしながら、学業成績が高いゆえに授業がつまらなすぎてかえってついていけない、自分のしたいことを理解してもらえない、高度な知識を有する故に他の子どもたちの中に入ると浮いた存在になる、といったことがあり、知的能力が高い故の彼らなりの困り感を有しているのである。こうした状況は、杉山（2009）が報告して以降、日本でもこれまで殆ど知られていなかった。加えて、状況をより複雑にしているのが、こうした知能の高い児童生徒は、なんらかの発達障害を併存している、という事実である。高い知能を有し、かつ発達障害のある人は「2E（twice-exceptional:二重の特別支援を要する）」と呼ばれることがある。だが、実際はどんな発達障害がいくつ、またどれくらいの割合で並存しているかもわかっておらず、こうした報告がない現状では、現場の理解を得られないのも致し方がない。</p> <p>本研究プロジェクトでは、こうした日本での現状を鑑み、高い知能を有する子どもの困り感の実態把握と認知特性に応じた支援法の検討を目的として、調査研究を行った。</p> <p><b>【本プロジェクトの成果】</b></p> <p>本プロジェクトでは、親の会や相談会などを通して、日頃本人および保護者が学校や生活上で困り感を訴えている高い知能を有する子どもをもつ保護者の参加者を募り、42名の方から調査結果を受領した（以下、高知能群と表記）。調査では、当該児童生徒の知能、および発達障害特性を調査する質問紙（協調運動の評価尺度であるDCDQ-J、社会性の評価尺度で自閉症スペクトラム障害の特性と関係があるSRS-2、社会的な適応度やメンタルヘルスなどを評価可能なSDQ、感覚の特異性を評価する感覚プロフィールを用いた。これらの評価尺度は、実際に全世界で使用されているスタンダードな評価尺度であり、日本人の標準値がある。この調査は、本学研究倫理委員会の審査を経て実施されたものである。</p> <p>DCDQでは、合計得点及びすべての下位項目で男女ともに標準サンプル群との間に有意差が見られたことから、高知能群は協調運動機能に困難を抱えている割合が高いことが示された（図1参照。図は男女合わせたデータ）。SRSでは、すべての項目で男女ともに標準サンプル群との間に有意差が認められたことから、高知能群は社会的困難度が高いことが示された（図2参照。図は男女合わせたデータ）。SDQでは、情緒の問題、行為の問題、不注意、友人問題の4項目の平均、及び4項目の合計で男女ともに標準サンプル群との間に有意差が認められた（図3参照。図は男女合わせたデータ）。このことから高知能群はメンタルヘルスの問題、および社会適応上の問題を抱えていることが示された。しかしながら、向社会性のみ両群間に有意差は認められなかったことから、高知能群は困難性を知的能力である程度カバーし、社会適応行動を意識して行っている可能性がある。これは、通常定型発達においては前注意的な行動である社会適応行動をある意味意識して行っていることを示唆するものであり、その結果日常生活に何かしらの負荷がかかっている可能性を</p>	

窺わせるものである。感覚プロフィールでは、4つの象限（低登録、感覚過敏、感覚探求、感覚回避）いずれも標準サンプル群との間に有意差が見られた（図4参照。図は男女合わせたデータ）。興味深いことに、自閉症スペクトラム群のサンプルにおいても、高知能群との間に有意差が認められた。このことから、高知能群は非常に幅広い感覚の特異性を示しており、いわゆる高知能群が有している感覚偏奇は、環境の変化を敏感に感じ取った結果、種々の適応の問題が現れている可能性が示唆された。

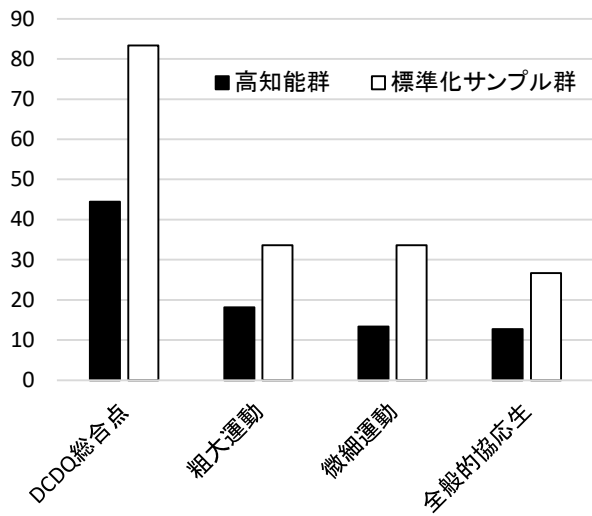


図1 DCDQ-Jの得点

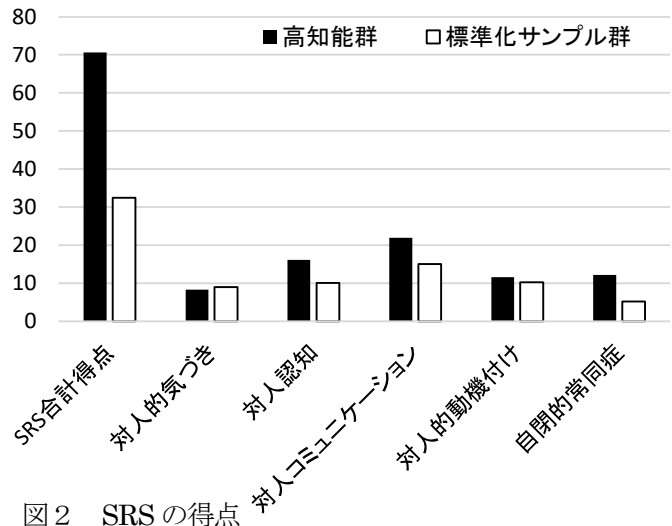


図2 SRSの得点

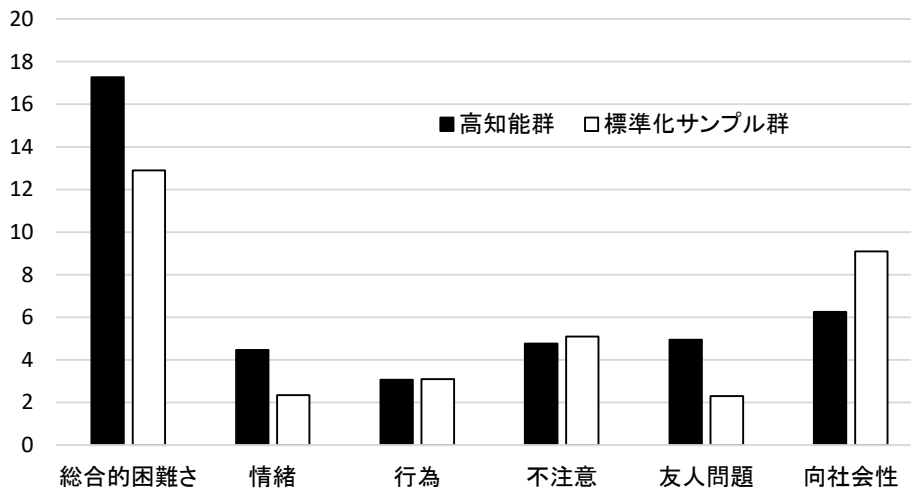


図3 SDQの得点

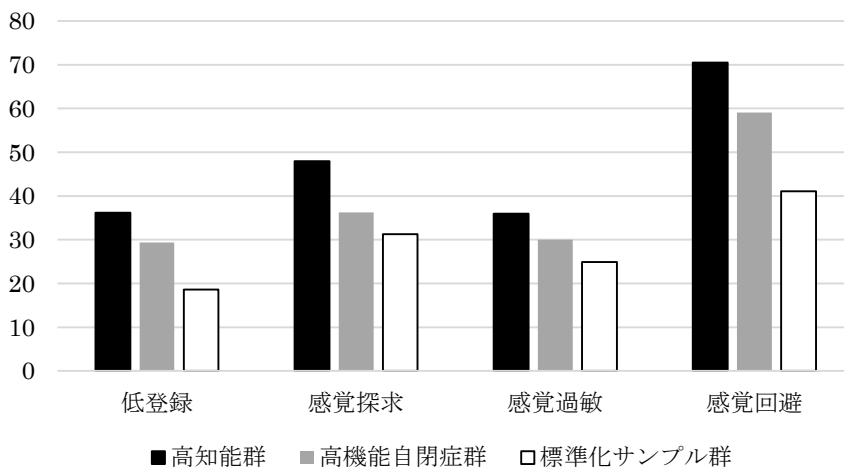


図4 感覚プロフィールの得点

相関結果については、前検査IQとSDQの友人関係との間に相関が認められた ( $r = .49, p < .01$ )。FSIQは、それ以外の項目との相関は見られなかったことから、IQの高さと発達障害特性との間には関係がないことが示された。したがって、本研究の対象者において彼らの困り感は、発達障害特性による困り感である可能性がある。興味深いことに、粗大運動と友人関係の間にも有意な相関が認められた ( $r = .37, p < .05$ )、先行研究を裏付ける結果であった。厳密には因果関係を論じることはできないが、粗大運動が先天的なものであることを考えると、運動の苦手さは友人関係を悪化させる可能性がある。そのほか、SRSの5つの項目でDCDQの粗大や合計得点との間で負の相関が認められた。これは、自閉症の特性、社会性の困難度が高いほど、協調運動機能が低いことを示している結果である。DCDQの合計得点とSDQの合計、友人関係との間、さらにDCDQの粗大とSDQの友人関係との間、DCDQの微細とSDQの合計、不注意との間、DCDQの総合とSDQの合計、不注意、友人関係との間で負の相関が認められた。この結果は、協調運動機能が低いほど、情緒および行動面の問題が現れていることを示す結果である。SRSでは、複数の項目とSDQの合計、および友人関係との間に正の相関が認められた。特に、SDQの合計と友人関係はSRSの対人的気づき以外の項目と相関が認められたことから、社会的困難度が高いほど情緒および行動面の困難性が高いことが示された。感覚プロファイルの結果では、DCDQとSRSの殆どの項目と低登録および感覚回避との間で相関が認められた。この結果は、協調運動の悪さや自閉症スペクトラムの特性が強いと感覚の特異性がより強くなることを示しており、困り感のある知能の高い子どもは、感覚の問題と発達特性が複雑に関連していることを示している。

これらの結果を踏まえると、本研究の参加者において協調運動機能の困難性、自閉症スペクトラムの特性、不注意、およびメンタルヘルスの問題といった発達障害特性に加えて、メンタルヘルスの問題も高い割合で存在することが示された。さらになんらかの感覚偏奇も高い割合で見出せたことは重要な知見と言える。もちろん本研究において困り感を有する全ての高い知能の子どもがこの傾向を示すとは限らないが、発達障害特性が困り感と関連していること、感覚偏奇といった生物学的な基盤が存在していることは、非常に貴重な報告と言える。近年こうした感覚の特異性は社会性の障害と密接に関係していることが示唆されており、子どもたちの社会適応をより難しく、複雑にしている可能性がある。学校現場における支援においては、こうした発達障害特性に配慮した関わり、および感覚偏奇の存在を的確に把握し、個々の実態に応じた環境調整が求められるであろう。今後は、学校現場での具体的な支援ニーズをより深く検討し、教員の実践事例などについても検討を深めていく予定である。

#### 成果の公表の状況

【著書】なし

【学術論文】なし

#### 教育現場で活用可能な分野・教材等

通常学級における特別な教育的ニーズをもつ児童生徒の理解、および支援に有効である。また、本プロジェクトで用いた各種質問紙は、実態の把握に有効であり、個別の指導計画の作成の際の実態把握に用いることが可能である。

#### 配布又はダウンロード可能な資料

##### 問合わせ先

代表者：片桐 正敏

電話：0166-59-1373

FAX：

mail：Katagiri.masatoshi @ a.hokkyodai. ac. jp